独語

――癩文学といふこと――

北條民雄

青空文庫

昨日ＭＴＬで「療養所文芸の発展策その他」について書いた諸氏のものも拝見し、また原田嘉悦氏の雑記をも読んでみた。

原田氏は僕の言葉を引用してあるのだが、まあそのやうなことはどうでもよいことであるかも知れない。しかしあれは「自殺志願者」に贈るために書かれたもので、おまけに僕も引つぱり出されたのであつてみれば、僕もまたあの文章を頂戴すべき一人なのであるかも知れない。もつとも、僕は頂戴はするけれども、ただ頂戴するだけだ。といふのは、ああいふ言葉といふものはなかなか立派すぎて、僕みたやうな毛の生えた虱にはなんだか服膺出来さうにもないやうな気がするのだ。僕なぞが服膺したら、多分、腹下しをするに違ひない。で、まあ僕は、おつき合ひに一つだけ微笑をしてから、そのまま原田氏にお返しして置いた方がよささうだ。

皮肉を言ふな、と誰かが言ひさうな気がするが、僕は本当のところ正直に言つてゐるのだ。正直といふものが、なんとなく皮肉に聴えるとは、なんと困つた時代にわれわれは生れ合せたものではないか。

単純、といふことが尊ばれるのは、ひよつとしたらそれが滑稽なためかも知れない。だつて単純澄明な主張といふものは、なんとなくユーモラスな美しさを持つてゐるではないか。複雑な滑稽さといふものは毛の生えた虱のやうにいやらしい。

ドストエフスキーは作中人物に自殺させるのが実に名人だ。われわれは文豪達が作中人物に自殺させる光栄を数多く見せられた。有名なところではフロオベルの『マダム・ボバリイ』、トルストイの『アンナ・カレニナ』、ドストエフスキーでは特に「キリーロフ」をあげることが出来る。また『カラマゾフ』のスメルヂャコーフもいい。

しかし何といつても素晴しいのは「キリーロフ」の自殺で、これはたうていその作を読まぬ人には伝へ難い。（三笠版ド全集第十一巻 383-410 頁）訳者は原久一郎氏だ。自殺に就いて何か語る人は先づこれを一読してからにして貰ひたい。いや、それよりも私は『作家の日記』のうちの或る章を読んで貰ひたいと思ふ。ドストエフスキーは或る少女の自殺を考察した後「知識階級の中に次第に増大して行く疫病的自己絶滅は、不屈不撓の観察と研究に価する余りに真剣な事柄である。」と述べて、決して結論めいた言葉を挟まなかつた。即ち作品の人物達の自殺でそれを結論したのか？　キリーロフを初め、スタヴローギン、スメルヂャコーフ、クラフト、スビドリガイロフ、等々の自殺で――。

遺書といふものはたいていきまつて下らないものだ。といふよりも、遺書といふものはそれを書かうとするとどうしても下らなくならざるを得ないのだ。何故かといふと、人間といふものは死を覚悟するともうそれからは自分の心理について思ひ違ひばかりしたがる奇妙な傾向を持つてゐるからだ。もつとも、われわれは偽りなく自己を眺めた芥川龍之介氏の遺書を持つてゐるけれども、しかしあれは芥川が作家であつたからで、近代の作家ほど自分の心理を眺める練習を積んでゐるものはないのだ。とはいへ、芥川氏においてさへ

も、自分の死の理由については、果して正当に批判し語り得たかどうか？　つまり自己を思ひ違へるだけではなく、もつと大きな何かがあるのではないか。人間は自分の今の心理に就いてはかなりよく判るものだが、過去をも含めた今の自己といふものはなかなか解り難いものだ。そして更に判り難いのは自分の位置だ。「ああ俺は今一体どこにゐるのだらう?」といふなげきは、楽しげな失恋者の感想だけではないのだ。これはもう時間といふ武器を持つた孫たちにゆづるべきものらしい。

『作家の日記』の中でドストエフスキーはまたもう一つ、十二歳の少年の縊死について書いてゐる（一八七七、一月）。その少年は教師の命令に服さなかつたので、その罰に午後五時まで学校に残らされたのだ。ところがその日少年は楽しい命名日に当つてゐて、家では家族がもう用意をしてゐたのだ。少年は命名日を祝ひ楽しむことも出来ず学校に一人残されたといふ訳だ。そこで悲しみの余り首を縊つてしまつたらしいのだが、ドストエフスキーはこのことを語るうち或る個所で特に括弧をして「現代の子供等の中、誰一人これを（自殺を）知らないものがあらうか。」と言つてゐる。横光利一氏は括弧といふものは作家の心理の一番よく出るところだと言つてゐるが、この場合においても、ドストエフスキーの言ひたかつたことは第一番にこの短い括弧の中の言葉と思はれる。

右のことは勿論帝制時代のロシヤでの話であるが、しかし一九三〇年代の現代の日本にこれと同様な事件はないか？　僕は十三四の少年少女の自殺をもう幾つも新聞で見た。それから何の理由もなく（これは外見上のことだ）ビルヂングの上から飛び下りたり、単に会社を馘首されたといふ簡単な理由で鉄道に飛び込んだりした二十前の少女のことも知つてゐる。重要なことは自殺の直接の動機ではないのだ。直接の動機などたいてい遺書と同じやうに愚劣でばかばかしい。即ちそのやうな愚劣でばかばかしいことが、何故に自己を滅すといふやうな、少くとも彼個人にとつては大事件であるところの自殺に至らしめたか、この点が大切なのだ。自殺者達の直接の動機を指摘して、その下らなさを笑つて満足してゐられる者には、先づ自殺を語る資格がないと言つてよい。

次に療養所新文芸の発展策だが、実を言ふと、僕もこの質問を受けた一人なのだ。しかし、本当のところを言つて、僕はこの質問に答へる用意がてんでないのだ。といふのは、僕は今まで一度も療養所文芸といふものを書きたいと思つたことがないし、また書いたこともない有様なのだ。今後も、僕は自分が小説を書いて行けるかどうか疑問だが、兎に角書けるものとしても、それが療養所文芸といふものでは多分ないだらうと思つてゐるし、やつぱりそれに書きたくもないのだ。

かう書くと、思ひ上つてゐるとか、生意気だとか、まあそれに類した非難があるのは僕も承知してゐるが、しかし、よしどのやうな非難があるにしても、僕はこの場合も出来る限り正直に述べるより他に手を知らぬ。

といつて、僕は決して療養所内に同人雑誌が生れることに反対するのではない。それどころか、僕は大いに賛成であるし、またかう

した同人雑誌によつて新しく強力な作家が出現することにも大いに期待するものだ。ただ僕の言ひたいことは、かうして生れた雑誌から、療養所文芸とか癩文芸とかいふ文字を一切抜きにして、よろしく単なる文芸雑誌にして欲しいのだ。つまり、癩院から出る雑誌だから、癩者の書いたものだから、何か特別に光つてゐるかも知れない、といふ風な色気を全然抜きにするのだ。癩といふものは、性病とか、胃病とか、睾丸炎とか、まあそんなものと同じやうに、単に一つの病気の種類なのだ。そりや癩はたしかに他の病気と較べれば物凄いところがあるが、しかしそれは比較した上の五十歩と百歩との相違に過ぎない。もし癩者の書いたものが癩文学なら、結核者の書いたものは肺文学、胃病者の書いたものは胃文学といふことになつてしまふではないか。もしさうだとすると、ドストエフスキーはてんかん文学、夏目漱石は胃文学、ストリンドベリーは発狂文学——。やれやれ。

　兎に角癩患者も、もういいかげんで自分の病苦を自惚れるのをやめたいものだ。「現実は苛酷なものだよ。」と言つて苦々しげに横を向いた小林秀雄氏の言葉を、僕は時々思ひ出す。自分のことを言ふのは少々てれ臭いが、これは阿部知二氏が僕の病気のことを言つた時、小林氏の阿部氏への答へだ。あの男が癩であらうが、盲目になつて小説が書けなくなるやうにならうが、俺の知つたことか、要するに現実は苛酷なものさ——といふ風な意味なのだ。これに対して僕は何と答へたらいいか、からからと笑つて相槌でも打つてみるより仕方はないではないか。

　新しい文学といふものは新しい人間像の発見からはじまる。フロオベル、ドストエフスキー等のあの文章苦も、彼等の発見した新しい人間像を定着させるための苦心だと、中村光夫氏が『文芸』六月号で言つた。新しい人間像を自己のうちに有たぬ限り、現代の作家は筆を折るべきではないか。単に癩患者を見ただけで、新しい人間を発見したやうな早合点は、これはつまり滑稽といふものだ。無論これは他人に向つて言つてゐるのではない。つまらない、ちつぽけな、僕の覚悟のやうなものだ。

　この間新聞を見てゐると、富沢有為男氏が作者に加へられた批評に不満を訴へてゐられた。それを読みながら私は何か重苦しいやり場のない気持にとらはれてならなかつた。氏の言はれることがみな一つ一つ胸に応へるのだ。自分の作を理解して貰へぬ時の作家の苛立たしい気持、まだ羞(はにか)みながら、しかし懸命に自己存在を主張しようとしてゐる自分の作が、無理解な土足に踏みつけられて傷ついて行くのを眺める気持、それは我が子を眺める親の気持にも似てゐよう。

　しかしながら子供の喧嘩に親が出るのはやはり愚劣で浅ましい。作家は黙つて次の作を考へてゐればよろしい。一たび自己の胎内から投げ出された限り、それは引金を引かれた弾丸だ。あたるかあたらぬかは神様だけが御承知だ。神様の気心を知つてゐるのは時間だけだ。時間といふ巨大な批評家、しかも作者の生きてゐるうちは一語も発せぬ批評家を前にして、それにすら黙つて堪へて行くより仕方がないのだ。

「所謂療養所文芸の発展策」これが本誌より私に与へられた課題である。所謂療養所文芸とは一体何か。この題名の曖昧さは何故か。療養所文芸とは、その発展とは、何を意味し、どの方向に発展するものなのか。一般ジャアナリズムの線上に乗ることなのか、それとも癩運動に結びついてか。或は癩文学と療養所文芸とは同一のものか。

　右の題目に答へるためには先づこのやうな問題を解決しなければならぬ。その後に初めて発展策も考へられるであらう。しかし、今さらこのやうなことを真面目さうに書いて見るほど私も白ばくれてはゐられないのだ。もし強ひて書けと言ふなら、療養所文芸などいふものを考へるな、と書くよりどうにも致方はないのだ。もしそのやうなことを書いたなら、誤解されるくらゐが落ちだらう。独語を記す所以である。

　フロオベルの書簡を読むのが、近頃の私の第一の楽しみだ。アンドレ・ジイドは五ヶ年の間この書を枕頭の書としたといふ。もしこれがフロオベルへの侮辱であるならば、それなら何故彼はこのやうな手紙を書いたのか。

「君は嫌悪にへたばり抜き、怒りに胸も張り裂け、悲哀に絶え入り息の根もとまりさう……。」とある。辛抱することだ、砂漠の獅子！

「人間などいふことにくよくよせず、ミュウズなんかうつちやつておくさ。知能が驚くばかりの勢ひで成長するのを君は感得するだらう。不幸を逃れる唯一の道は、芸術に立て籠り他は之一切無と観ずるにある。大盤石の上に安坐する時は誇りが一切に代るのだ。常に不幸であることを肯(がへん)じて以来、僕は誠に幸福だ。僕には欠けてゐるものが多い、巨万の富の豁達さも、世の恋人達の愛情も、放蕩者の快楽慾も僕にはなかつたと、さう君は思はないか。しかし僕は、富貴も恋も慾情も何等未練がない。僕の精進ぶりには人の驚く程だ。僕は実際生活に決定的の別れを告げてしまつたのだ。これからはもう当分、自分の部屋に五六時間の安静と、冬は燃えさかる火、夜は自分を照す二本の蝋燭のほか何も望まぬ。」

　日づけは一八四五年五月十三日、東方旅行の途次、ミラノから友人に宛てたフロオベル二十四歳の書簡である。

（未完）

青空文庫情報

底本：「定本　北條民雄全集　下巻」東京創元社
　　1980（昭和55）年12月20日初版
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Nana Ohbe
校正：伊藤時也
2010年9月12日作成
2011年4月15日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

独語

――癩文学といふこと――

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　北條民雄
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/